

# 類義語としてのカタカナ語・ 和語の意味相違の考察

——「テーブル」「デスク」「机」の意味相違  
及び「テーブル」の基本語化——

陳 暁静

## 要 旨

日本語は「和語」「漢語」「カタカナ語」の3つの語種に分けられている。研究者によっては「混種語」を含め、4つの語種に分けている場合もある。従来の和語、漢語があるのに意味の近いカタカナ語も併用されている。例えば「鍵」と「キー」のような語である。カタカナ語は日本語学習者にとって難点の一つであるものの、和語／漢語の類義語も同時に存在している。したがって、その語の意味を適切に使用することは、さらに困難になる。本稿では、「中日新聞コーパス」を用い、「テーブル」を中心に、その類義語である「デスク」「机」との意味の相違を考察した。テーブルは主に食事用、話し合う場、交渉の場に用いられ、「デスク」は事務用、マスコミの担当者を指すことが多く、「机」は学習、勉強に関連する事柄に用いられることを明らかにした。また、「朝日新聞コーパス」で経年変化を追い、「テーブル」及びその類義語「デスク」「机」が使用されるに至るプロセスとただモノを指す用法からそのモノに関わる様々な事柄にまで使用されるようになった変化を検討した。

キーワード：類義語、テーブル、机、デスク、フレーム意味論

## 1. はじめに

近年のグローバル化により、カタカナ語<sup>1)</sup>の使用が増加しつつあり、新しく受け入れられたカタカナ語の意味はもちろん、以前からあるカタカナ語も日本語学習者にとって語を適切に使用するのが難しい状況がある（陣内 2008）。しかし、それを調べようとしても、適当な資料・辞書はあまり見つからない。また、多くの辞書では、カタカナ語の解釈の中に第1の意味として挙げられているのはその語の類義語（和語あるいは漢語）であり、学習者を一層混乱させると考えられる。母語話者は、カタカナ語とその語の類義語を無意識に使い分けできるが、学習者にとっては非常に難しいところである。母語話者がそのような使い分けをしているのは恐らく何らかのルールがあるだろうと思われる。それを明らかにするため、本稿では新聞コーパスを用い、共起す

る語との関係（以下共起語と呼ぶ）からその語の「フレーム<sup>2</sup>」を探ってみる。

「フレーム」と言うのは語と結びついた背景的世界知識のことである。いわゆる、語の意味は一般に何らかの経験、認識、習慣を背景として理解されるものであると松本（2003）が指摘している。フレーム意味論の観点から考えると、発話者は自分自身に関連する様々な知識を前提として語を使用し、発話者の発言に従い、聴者はその背景知識を喚起することによって理解すると松本（2003）が述べている。要するに、語の意味を理解するのに、辞書の意味だけではなく、使用する人々の経験、知識、習慣によって変わる。

今回のデータにそって例を示すと「テーブル」と「デスク」の違いである。この2語はともに物としては、〈物置の台、台の上で何か作業をする〉を指して使われるが、実物の上では「テーブル」は家庭用品、食事をする時に用いる台、話し合いの場の意味が用いるに対して、「デスク」は会社で仕事するとき用いる台を指しているという違いを考えておくことが必要である。辞書にはこのような説明が不十分である。本稿では、共起語からその語が関わっている意味範囲を明らかにし、語のフレーム<sup>2</sup>を探る。要するに、辞書のような論理的知識に基づき、母語話者の経験、知識、習慣によって語の辞書の意味以上に持っている性格、感覚を検討する。共起語を直前直後共起語と文中共起語<sup>3)</sup>に分け、各語の意味を検証する。また、カタカナ語が日本語としての年月が経つと基本語彙<sup>4)</sup>となるような場合もあり、各語種との共起が比較的に自由である「テーブル」を用い、基本語化したプロセスを追試する。

## 2. 研究方法

筆者は修士論文でカタカナ語を含む複数語を併用する類義語の意味上の相違を考察した。これを通して「カタカナ語」ごとに漢語／和語の直前直後の共起語の結合状況は様々であることを見た。その結果を踏まえ、本稿では「中日新聞」2006年度（筆者の修士論文の引き続きの調査であるため、同じものを使用する）のコーパスを用い、漢語／和語と共起する事例が多いカタカナ語を選び、その語の意味を検証し、さらに日本語として進出するプロセスも考察する。

次に、「中日新聞」2006年全分野により得た結果の中からカタカナ語との共起の事例が多い語を「朝日新聞」のコーパスにかけ、1879年から2010年まですべてのデータを用い、その語の経年的変化を追試する。以下、今回の調査語について辞書および先行研究での様子を見る。

## 3. 辞書の意味と先行研究

本稿では「漢語／和語」と結び付く割合が高い語「テーブル」及び「テーブル」の類義語である「デスク」「机」を扱う。まずこれらの語の辞書的な意味は、『日本語国語大辞典』（第二版）によると、以下の通りである。

- (1) テーブル i 洋式の食卓・応接用卓子。各種の生活必需品などを置く台。  
ii 工作機械で、工作物をその上に取り付けて、上下・水平・回転などの運動を行わせる台のこと。
- (2) デスク i 机。特に、事務机。  
ii 新聞社、テレビ局などの内勤者で、記事の取材・編集を指図する人。特に各部の部長：次長・主任などをさす。iii ホテルなどの受付
- (3) 机 i 長方形の脚つきの台。  
ii 文房具の調度として読者や報筆に用いる台。

次に「テーブル」と「デスク」の原語の意味を見てみよう。『ロングマン現代英英辞典』（第4版）に記載されている説明は以下の通りである。

- (4) *table* i furniture (a piece of furniture with a flat top supported by legs) ii sport/game (snooper/billiard/ping-pang etc table) iii list (a list of numbers, facts, or information arranged in rows across and down a page) iv on the table v turn the table (on sb) vi under the table vii maths times table viii group (the group people sitting around a table)
- (5) *desk* i a piece of furniture like a table, usually with drawers in it, that you sit at to write and work. ii a place where you can get information or use a particular service in a hotel, airport etc: the reception desk. iii an office that deals with a particular subject, especially in newspapers or television.

『ロングマン現代英英辞典』に記載されている *table* と *desk* の意味を見ると、上に挙げた「テーブル」の『日本語国語大辞典』での意味の中に〈(4) ii, iii, vii, viii〉の解釈が記載されていない。

彭飛 (2003) は日本語学習者を悩ませる外来語の研究をしたものであり、その中に「テーブル」「デスク」「机」の基本的な意味を述べている。それをまとめると、以下の6点になる。

- (6) i 「テーブル」「机」「デスク」の共通点は「台」ということ、そのうえで何かをすることができることである。
- ii 「テーブル」は食事をする「食卓」、または「足の長い机」「高い台」を示す。
- iii 「テーブル」は食卓の意味のほかに、会議や作業用にも使われ、食事や会話など憩いの場におかれる場合もある。周囲を囲むように座ることが多い。
- iv 「机」は広義の場合は、食卓も含む台の総称であるが、狭義には本を読んだり、勉強したり、物書きをしたりするための物であり、一定方向に向かって座ることが多い。
- v 会社では「机」という言い方が多いが、現在、「デスク」と使われることも増えている。
- vi マスコミの世界では「デスク」を編集長などの意味として使っている。

(6)を踏まえ、「テーブル」「デスク」「机」の相違点をまとめると、「テーブル」は食事、応接や会議などの場合に使われることが多く、周囲を囲むように座るものに対して、「机」の多くは勉強用、事務用であり、一定方向に向かって座るものということになる。「机」の代わりに「デスク」を使う傾向がみられると指摘している。

以上の辞書と先行研究に記載されている意味を比較すると、「テーブル」においては(6. iii)のように「会議や作業用また食事や会話の場を指す」「周囲を囲む形で座る」というような意味は『日本国語大辞典』の説明だけでは想像にくい。しかし、『ロングマン現代英英辞典』の〈(4) viii〉を見れば、そのような意味を読み取れる。同様に、〈(6) iv, v〉にあるような意味は国語辞典に出てこない。要するに、国語辞典の解釈は日常生活、使用者の背景、経験などとは切り離され、基本的、論理的なことしか記載されていないことが明らかである。しかし、一部の類義語は辞書だけの説明では分かりにくい。また、国語辞書と先行研究においては「テーブル」と「机」は食卓の意味として用いられていると述べているが、その違いは何かに言及していない。一方、彭飛(2003)は会社との関わりがあるのは「机」より「デスク」の使用が増えていると論じているがそれがなぜかは触れていない。

#### 4. 「中日新聞」における「テーブル」「デスク」「机」の意味分析

「中日新聞」2006年度における「テーブル」「デスク」「机」の使用状況を4.1の表1にまとめた。各語の共起語の意味によって右端の種類の欄を〈素材・形〉〈用途〉〈拡張〉の3つに分け、これを手掛かりとして分析する。本稿で扱う〈素材・形〉〈用途〉は実体的な「モノ」としての働き、用途、作用などを中心に見たものの、〈拡張〉は抽象的な役割、応用的・比喩的な用法によるものを中心に分類した。

本節では、まず「テーブル」の直前直後共起語から語種との共起を見る。次に、「テーブル」「デスク」「机」の3つの語につき、それぞれの「直前直後共起語」「文中共起語」に基づき、意味の相違を考察する。本稿での「直前直後共起語」は調査語の前後に直接に結びつく語のことを指す。例えば、「交渉のテーブル」「デスクワーク」のように「交渉」と「ワーク」をそれぞれ「テーブル」と「デスク」の「直前直後共起語」とする。例のように、各助詞「の」は所属関係を表すとき、「直前直後共起語」とする。「文中共起語」とは、文脈の中で調査語の意味の理解と最も関わりが深い語のことである。例をあげて見ると、「先行きは厳しいが、少なくとも両勢力が同じテーブルについた」のような場合は、「つく」を「テーブル」の文中共起語とする。

##### 4.1 語種との共起から見る「テーブル」「デスク」「机」の相違

表1を見ると、「テーブル」は553回出現しており、「デスク」は109回、「机」は480回ある。「テーブル」と「机」の使用頻度は「デスク」より明らかに多い。

直前直後の共起語の面から語種の相違を見ると、「テーブル」は、カタカナ語との共起(表1の網掛け部分)が「机」より多いが、和語や漢語との共起(表1の斜線掛

け部分)が「机」とあまり差がないのに対して、「デスク」はカタカナ語との共起が「テーブル」とほぼ同じであるが、和語や漢語との共起は少ない。

一方、「テーブル」は「カタカナ語」の「ミニ」「ダイニング」「マナー」などとの共起があり、漢語の「回転」「木製」と和語の「席」「丸」などとの共起も見られた。それに対して「デスク」は拡張の場合を除き、「カタカナ語」とだけ共起している。「机」は「カタカナ語」との共起は今回の調査では一例も見られなかった。以上を見ると「テーブル」と共起する語種は「デスク」よりかなり自由であることが分かった。

表1 「テーブル」「デスク」「机」の共起語

調査語	テーブル	デスク	机	類型
出現頻度	553	109	480	
直前直後共起語				
石-、木製-、いりり型-、回転-、青磁-、丸-、長い-など	25		12	素材
-型、-席	5			形
学習(の)-、勉強(の)-、書斎(の)-、学校(の)-			36	用途
作業-、会議-、事務-、執務-			8	
事務所の-、職員室の-、院長室の-、医務室の-など			25	
対話の-、居間の-、客間の-、洋間-	8			
台所の-、朝食の-、焼き肉店の-	6			
パソコン(の)-		2		
ヘアメイクの-、ダイニング-、ミーティング-など	14			
コーディネート	38			
サッカー-、テニス-、-ゲーム	13			
-セッティング、-セット、-フェア	14			
ブライダル-、コンサート-、インフォメーション-		9		
-マナー	11			
-ワーク		8		
-の仕事			1	拡張
-ごと、	4			
新聞-、事務局-、編集局-、政治部-、など		18		
応答-		6		
-(の)一言、-(の)顔、-(の)声、-(の)命、-(の)影など		15		
協議(の)-、交渉(の)-、証言-	37			
文中共起語				
洋間	1			用途
椅子、ソファ、ベンチ、	74	1	70(2)	
カウンター	4		1	
食文化、昼食、すき焼き、食事、ごはん、など	31			
書類、作家、画家、学校、書道、塾、幼稚園など	1		64	
記者、記事、		2		
~を囲む、につく、など	267		263	拡張
~に報告、~に相談、~に報告		48		

\* 「-」の前後は調査語が出現し、「~」の前後は文中に調査語が出現するもの。

以下、4.2節と4.3節においては表1に基づき、語の共起語から語のフレームを検証する。続いて5節においては、「朝日新聞」を用い、「テーブル」の進出するプロセスおよび「テーブル」の意味の受け入れられ方も探ってみる。

#### 4.2 直前直後の共起語による意味分析

表1に基づき、「直前直後共起語」から語の意味を考察する。まず、全体的に見ると、類型面では「テーブル」は〈素材／形〉〈用途〉〈拡張〉まで各面の共起語があるが、「デスク」は〈素材／形〉面の共起語が欠けている。「机」については各面に共起語が分布しているが、〈拡張〉面だけ非常に少ない。

各語を具体的に分析すると「テーブル」は、「デスク」「机」より共起語との出現頻度が高く、「木製」「丸」などとの共起が25語あり、〈素材／形〉を問うことが多いと考えられる。〈用途〉面では、「対話の」「居間の」「台所の」「朝食の」などとの共起があり、家庭、食事、話し合いの場でよく用いられることが窺われる。「ダイニング」「ミーティング」などとの共起も同じ解釈ができる。〈拡張〉面においては、「テーブル」は「協議の」「交渉の」との共起が多く見られた。話し合いの場面でよく用いられることから「交渉のテーブル」の意味に拡張され、抽象的な面に使用されるようになったと思われる。

それに対して「デスク」は、〈素材／形〉面は「木製」「丸」などとの共起が今回の調査では1例もなく、一方、〈用途〉の「パソコン」「ブライダル」「ワーク」などとの共起は見られた。したがって、〈素材／形〉より〈用途〉を重視していると考えられる。例えば、「ブライダルデスク」のように結婚式場の受付という使われ方のモノである。しかし、〈拡張〉面は「新聞」「編集局」などとの共起で、用途の用法から意味が拡張し、編集を指揮する役や人を指すようになっている。「一言」「顔」なども同じである。

続いて「机」は、テーブルと同様に〈素材／形〉を問うこともある。〈用途〉面においては、「学校」「書斎」「事務」などとの共起から見ると、勉強、執筆や仕事に関連する事柄に用いられると考えられる。〈拡張〉面は「-の仕事」のような例が見られた。やはり勉強や執筆に関わる用途から拡張し、それに関連する仕事を指していると思われる。

#### 4.3 文中共起語による意味分析

結論から先に言えば、文中共起語は〈用途〉と〈拡張〉面の模様から直前直後共起語で考察した説明と一致していることが分かった。語種の共起とは直接的な関連が薄いと思われる。

意味的な面から考えると、まず〈用途〉面では、例(7)のように「テーブル」は主に「椅子」「ソファ」などとの共起であり、家具の一種として使用されている。その他、例(8)のように、「料理」「ごはん」などとの共起も多く見られた。したがって、「テーブル」は日常生活においては家庭用品、食事する台として用いる。それに

対して「デスク」はそのような感覚が読み取れにくい。

以下の例(9)のように「机」は「いす」「ソファ」などとの共起が多く、その他は例(10)のように「勉強」「学校」などとの共起も多く見られた。やはり机はいすとセットとなり、学校で勉強する場面に用いられると思われる。

- (7) ソファやテレビなどが置かれた応接間、畳張りの和室、テーブルといすのダイニング、寝室—ちょっと豪華なマンションの一室と変わらない

掲載日 20060124 中日新聞朝刊 ページ 08 面名 朝刊地域経済

(これから例文の「ページ」は中日新聞の中のページを指している)

- (8) 立食形式で日本酒や料理をテーブルにずらりと並べるこれまでの試飲会の常識を打ち破り、一人一人の席を用意

掲載日 20060927 中日新聞朝刊 ページ 19 面名 朝刊尾張総合

- (9) 机やいす、ベンチなどの備品類も、木製品の導入を進める考えだ。

掲載日 20061219 中日新聞朝刊 ページ 18 面名 朝刊岐阜県版

- (10) 辰也(高一)勉強は一人で机に向かうけど、学びは人と人とで知識を高め合うことかな。

掲載日 20060123 中日新聞朝刊 ページ 25 面名 朝刊中高生左

次に〈拡張〉面においては、表1のように「テーブル」と「机」は「～を囲む」「～に着く」などとの共起が多く見られた。戻るが、「テーブルを囲む」については、例(11)のように〈用途〉面の例があり、食事に用いられている。一方、例(12)は同じく「囲む」に関わっているが、内容から見ると「食事をする」のではなく、「話し合う」場として用いられている。例(13)のようにも使われ、テーブルは交渉する場所を指している。また、例(14)のように「書類」との共起もあったが、勉強や学習などに使うものではなく、やはり仕事の話し合う場を指していることは明らかである。

- (11) 三世代がテーブルを囲んだ昼食時には笑い声ははじけ、草取りなどの清掃活動もあった。

掲載日 20060914 中日新聞朝刊 ページ 17 面名 朝刊東三河総合

- (12) 約10人ずつでテーブルを囲み、日ごろの悩みや苦勞を語り合ったり、互いに役立つような情報を交換したりした。

掲載日 20060108 中日新聞朝刊 ページ 18 面名 朝刊近郊版

- (13) 先行きは厳しいが、少なくとも両勢力が同じテーブルについた。前向きに考えて交渉を見守りたい。

掲載日 20060522 中日新聞夕刊 ページ 06 面名 夕刊外電

- (14) 福井まちなかNPOの永井弘明理事長(50)は、これまでの活動記録の書類をテーブルに広げ、「将来の福井のまちがどんなふうになるのか想像できない」と指摘する。

掲載日 20060219 中日新聞朝刊 ページ 20 面名 朝刊福井中日

ところで、「机」も「テーブル」と同じく「～を囲む」との共起が見られたが、例

(15) のように「机を囲む」というのは議論するためである。今回の調査では机を囲んで食事をする例は1例も見られなかった。机は例(16)(17)のように学校または会社のオフィスなどに置かれている物を指している。

(15) 愛知県瀬戸市にある河村電器産業は、配電盤やブレーカーなどを製造販売する会社。

同社労働組合の一室には、会社側三人と組合員九人が机を囲んで議論していた。

掲載日 20060117 中日新聞朝刊 ページ 14 面名 朝刊生活

(16) げた箱は木製で、体育館の北側出入口外に置かれていた。げた箱の近くにあった机4つや校舎との通路に張ってあったポスターも焼けていた。

掲載日 20060103 中日新聞朝刊 ページ 26 面名 朝刊岐阜県

(17) 三十三の個別オフィスと会議室を設ける。各室に机や高速インターネット回線などを備え、受け付けや電話対応のサービスを提供する。

掲載日 20060120 中日新聞朝刊 ページ 09 面名 朝刊地域経済

最後に「デスク」は表1で主に〈拡張〉面に用いられている。例(18)のように「デスク」はその物自体を指すのではなく、その仕事を担当している人物を指していると考えられる。また、同じ仕事をしている人々の上司を示していると思われる。

(18) 翌日、成果をデスクに報告

掲載日 20061002 中日新聞朝刊 ページ 14 面名 朝刊なごや東販

以上の分析によると、「テーブル」「デスク」「机」は各々の用途の意味とその用途に関わる人々の仕事をする様子、仕事の内容、場所を指していることが分かった。確かに今回の調査においても「テーブル」は「食事」「会談」「応接」に使われているという結果が先行研究と一致した。しかし、「テーブル」は食事する場所だけではなく、「ヘアメイクのー」のような新しく日本に受け入れた用途にも使われている。また、「ーゲーム」のように台ではなく、「テーブル」の上での行為のことを指していることが彭飛(2003)には述べられておらず、「交渉のテーブル」のように、物ではなく、行為が行われる場所を指すことも欠けている。

それに対して「机」は先行研究も辞書も「食卓」の意味で用いるとされているが、今回の調査では「食卓」として使われる例が見られなかった。「～を囲む」との共起から見ると、彭飛(2003)が述べたように「机」は一定方向に座り、勉強や仕事をするという使い方だけではなく、「テーブル」で見られたように周囲から囲むような用法もあった(6) iii, iv)。また、「机」は、確かに表1の共起語に現れたように、主に学校で使われていることが分かった。一方で、事務用の意味も用いられているが、総数の中で僅かしか占められていなかった。その点は、彭飛が述べているように会社では以前「机」が使われていたが、現在「デスク」の方が多くなったという点から説明できる。

次に、「デスク」においては、事務用の机の意味とマスコミ世界で編集担当を指している意味は先行研究や辞書に既に記載している。だが、直前直後共起語の中では〈用途〉面はカタカナ語との共起しか見られなかった。それは「パソコンの」「ブライ

ダル」などのような共起語である。それらを見ると、仕事や受付などに関連する物事が従来の事柄より新たな形式であるため、「デスク」は「机」より使いやすと考えられる。もちろん語種の影響もある。

以上、中日新聞によって「テーブル」「デスク」「机」の相違が明かになったが、ここからは、朝日新聞のデータに基づき、3つの類義語の意味変化を考察する。

#### 4.4 「テーブル」「デスク」「机」の意味変化の考察

表1を見ると「テーブル」は「カタカナ語」「漢語」「和語」との共起がすべてできる。各語種との共起が比較的に自由である。意味の面においても、実物の本体（丸テーブル）を指したり、実物よりもその上で行う行為（サッカーテーブル）に焦点を当てたり、実物がなくても行為（交渉のテーブル）を表したりすることができる。よって、「テーブル」の意味が幅広く使われていることが分かった。

ここから、「テーブル」の拡張事例が全体的な使用の中において、どのような存在であるかが窺える。以下は、「朝日新聞」を用いた調査結果である。図1で「テーブル」の総使用数と拡張事例としての使用数の図を示した。

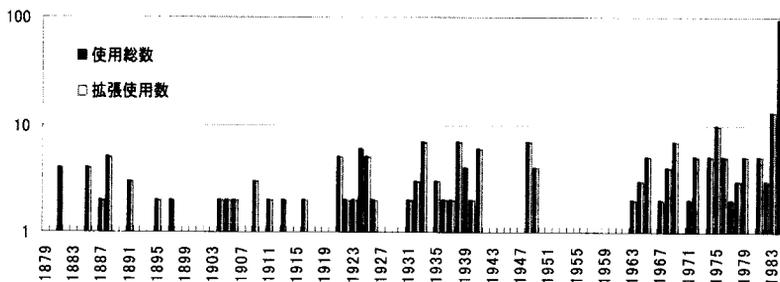


図1 「テーブル」の総使用頻度と場所の使用頻度の分布

図1を見ると、拡張使用例は1948年以降使われるようになった。そこまでは「物としての意味」に使われ、続いて1964年頃から、拡張的意味の使用数も増加しているのが見られる。日本語としてこの語が定着していくうちに意味の使用範囲が広まっていることが明らかである。1968年頃日本の第2期高度成長期に入り、その前後において外来の物、国際的なことも増えつつあり、語の使用量と意味領域もその影響を受けたと考えられる。

一方、「デスク」は、調査の範囲で最初に日本語として受け入れられたのは1898年であった。「テーブル」より非常に遅いが、受け入れられた方法は例(25)のように広告欄で日本になかった物の名称として示されている。

(19) 甲号デスクセット電話機 ソリッドバック電話機……

1989/12/17 東京/朝刊 8頁 広告

次に現れたのは1912年の2例である。1898年と同様に広告欄にモノとしての意味

であり、それぞれ「チーフオペレーターデスク」と「インフォーマーションデスク」の用例であった。続いて見出したのは例(21)のように1924年に事務用の「デスク」としての用例であった。「デスク」の用例が増えたのは担当人物など〈拡張〉面の用例が増えてきたからである。1955年の例(22)は物ではなく、人を指す用法である。  
 (20) 事務のデスク、書類棚……

1924/10/14 東京/朝刊2頁

(21) デスクは次長のこと指している。

1955/10/1 東京/朝刊7頁 3段 記事

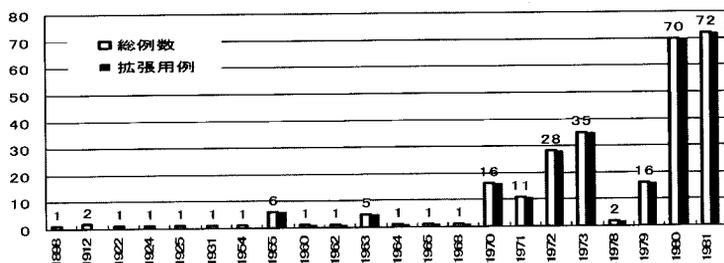


図2 「デスク」の総使用頻度と担当人物使用頻度の分布

「デスク」の用例数と意味変化の用例数を図2にまとめた。それを見ると、今回の調査では、1955年以降は拡張面の用例数と総例数の回数が同じである。主に「デスクの手帳」「デスクの日記」「デスクの引継帳」などのような使用例である。物としての意味では使われていない。したがって、4節の表1のように現在「デスク」は〈素材/形〉と〈用途〉面の用例数が少なく、〈拡張〉面を中心として用いられている。その理由は、図2のように「デスク」は1955年以降の用例がすべて拡張の意味に使われているからであると考えられる。

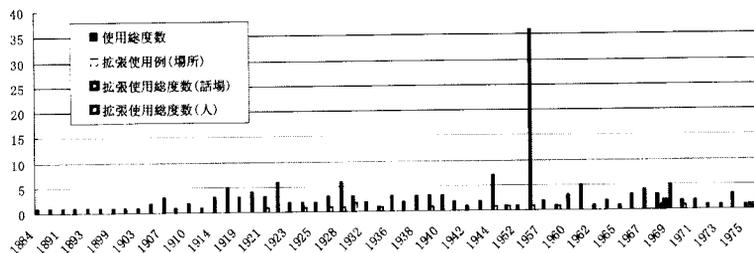


図3 机の総使用頻度と拡張使用頻度の分布

図3は「机」の用例変化の図である。「机」の総使用量では、「テーブル」と「デスク」のように急増したり、使用しなかったりする現象が現れなかった。「机」は和語で従来の大和言葉であるから、当然、昔から使用されている言葉であり、変化

が穏やかであると思われる。机は最初に「物としての意味」で使われ、次第に拡張された意味に用いるようになった。その点では「テーブル」と同じ変化をしていると思われる。「テーブル」と同様に「物としての意味」から拡張し、その物の周り、あるいはその物の自体の場所を指すようになった。場所を指すようになってから、その用法が暫く続いた。1970年頃にはほぼ同時に話場、その場所にいる人を指すようになった。

図1・2と3を合わせてみると、「テーブル」「机」は同じような意味変化のプロセスを経過してきたことが分かった。現在（第4節の表1）使われている意味では図1・2と3にも反映されている。「テーブル」「デスク」「机」の意味相違が生じるのは、新しく受け入れられた語「テーブル/デスク」が従来からある語「机」の意味領域に進出しつつあるからである。通時的な言葉使用の環境変化によって、新しく受け入れられた語の意味が従来にある大和言葉の意味領域に進出していると思われる。したがって、原罪（第4節の表1）「デスク」は「拡張」面が〈物としての意味〉より多く現れたのも1955年頃から「デスク」は編集局の次長を指すような使用環境の影響が受けられているからであると考えられる。

### 5. おわりに

「テーブル」「デスク」「机」のフレーム及び意味関係を考えると、以下の図4のようになる。まず、「テーブル」「デスク」「机」のモノとしての基本的な意味はすべて物を置く台として用いられている（彭飛（2003）第3節を参照）。物として基本的に考えられるのは4つの足があり、周りのどこかに人が座り、イスとセットになるなどの共通性を持っていることである。一方、台としては同じであるが、用途によって置く場所、使用面が異なる。

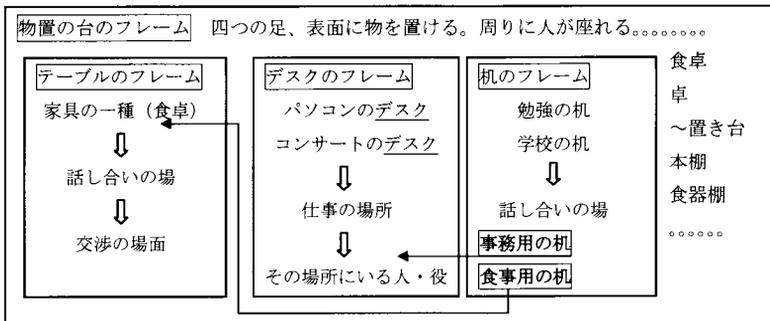


図4 「テーブル」「デスク」「机」のフレーム

〈用途〉面においては、「テーブル」が日常生活の上、家庭用品の中に存在しているという感覚が強い。「食事」「台所」などとの共起が多いからである。「デスク」は主

に「コンサート」「ブライダル」などの共起が多く、物置の台という実物の意味よりその台の上で何か作業するという意味が強く感じられる。文中共起語の〈用途〉面を合わせて、「デスク」は会社（特にマスコミに関わる会社）、仕事場に置き、仕事に関わる場面に用いるのが相応しいと言える。「机」は「学習」「勉強」などとの共起が主に出現する。したがって、「机」は学校に置き、学習などに使用される物置の台と考えられる。以上、物として使われている「テーブル」「デスク」「机」は用途によって使用する感覚が異なることが分かった。

〈用途〉面と〈拡張〉面を合わせてみると、以下のようなことが考えられる。まず、「テーブル」は食事する、家庭用品の一種の意味から人々の話し合う場までを指すようになり、さらに「交渉のテーブル」のような用法は実物の「テーブル」がなくても、交渉の場を指すだけでも使用できると言える。続いて、「デスク」は仕事するのに用いる台から、仕事を指揮する役や人物まで用いられることが分かった。最後に「机」は同じく用途面の「学習」「勉強」に用いる意味から議論の話場まで拡張していると考えられる。

先行研究や一部の辞書<sup>9)</sup>の説明を見ると「机」は食卓の意味を挙げているが、今回の調査では「机」は食卓として使われる例は見出ししていない。よって、「テーブル」「デスク」が日本語として受け入れられていないときに「机」は学習だけではなく、食事をしたり、仕事をしたりする場合に用いられたと考えられる。しかしながら、「テーブル」「デスク」が使用されるようになってから、「机」を含め、語のフレームが用途によって次第に分かれてきたことが推測できる。その点から見ると、やはりカタカナ語は使用年月が経つと共に、元にある和語／漢語の意味領域まで進出する傾向があると考えられる。今回の調査の中に「テーブル」は1879年頃から日本語として用いられたが、拡張面の用法は1964年頃から初めて使用されるようになった。そして1984年頃から急に増加したデータが得られた。その例は「交渉のテーブル」の形である。こうした史的变化、基本語化の経過があることが分かっているが、それについては別稿としたい。

今後はさらに多くのカタカナ語と和語、漢語の類義語を考察し、このような類義語の一般性あるいは類型を見出したい。今回の調査は新聞に基づいたため、書き言葉のみの結果になった。語のフレームの研究は書き言葉だけでは不十分であり、やはり話し言葉の調査も求められる。また、日本語教育面における指導法も考える必要がある。

## 注

- (1) カタカナ語の定義は様々である。『新編日本語教育』（2005）では、「室町時代末期以降、主として欧米言語から日本語に入ってきた語のことを外来語というが、欧米諸言語がその大半を占めることから、洋語とも、また、カタカナ語で表記することからカタカナ語とも呼ぶことが多い」と記載している。本稿に用いるカタカナ語とは、欧米から入ってきたカタカナ語で表記される語とする。

- (2) 「フレーム (frame)」とは、松本 (2003) によると認知意味論における中心的概念のひとつである。この用語はもともと人工知能関係の研究において使われてきた用語であるが、フィルモア (Fillmore 1975) によって意味論に持ち込まれたものである。類似の概念を表すものとして、レイコフ (Lakoff) は「理想化認知モデル」、ラネカー (Langacker) は「認知領域 (cognitive domain)」という語を用いている。松本 (2006: 65-66) は次のように定義している。「語の意味は一般に何らかの経験、認識、習慣を背景として理解されるものである。この、語と結びついた背景的世界知識がその語のフレームと呼ばれるものである」
- (3) 「丸テーブル」のように「丸」を「テーブル」の中の直前共起語といい、「テーブル席」の場合は「席」が「テーブル」の直後共起語という。「テーブルを囲んで議論する」のように「～を囲む」「議論する」は「テーブル」の文中共起語という。
- (4) 基本語彙とは語彙の中心部にあって、金愛欄 (2006) は、「使用率が大きく、しかも対象とする言語作品あるいは言語体系の中にいくつかの層を設けて考えることである場合、できるだけ多くの層に出現する語の集合をいう」と定義している。
- (5) 『広辞苑』(第6版) 机 i 飲食の器物をのせる台。食卓。  
ii 書を読み、字を書くのに用いる台。

#### 参考資料

- 1) 『日本語国語大辞典』第2版
- 2) 『ロングマン現代英英辞書』第4版
- 3) 『広辞苑』第6版
- 4) 中日新聞 2006 データを立命館大学大学院言語教育情報研究科研究生の田中良氏により開発された多言語コンコーダンサー (HASHI) につけ、得られた結果を利用
- 5) 朝日新聞 1879～2010 「立命館大学図書館 論文・記事検索データベース」の「開蔵Ⅱビジュアル」を利用

#### 参考文献

- 1) 石川晶康 (2008) 『よくわかる日本史』学習研究社
- 2) 大堀壽夫 (2007) 『認知言語学』東京大学出版会 pp.36-40
- 3) 金愛欄 (2006) 「外来語「トラブル」の基本語化」『日本語の研究』第2巻2号 pp.18-32
- 4) 陣内正敬 (2008) 「日本語学習者のカタカナ語意識とカタカナ語教育」『言語と文化』pp.47-60
- 5) 松本曜 (2003) 『認知意味論』大修館書店 pp.65-71

6) 彭飛 (2003) 『外国人を悩ませる日本語からみた日本語の特徴』 凡人社

7) 日本語教育学会編 (2005) 『新編日本語教育辞典』 大修館書店

(ちん・ぎょうせい 本学博士後期課程)